清水正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑳

続 ひどい名前の植物たち

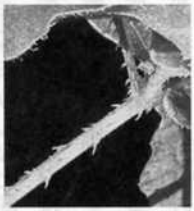
「一里一尺　自然をたずねて④」で取り扱ったテーマの続編です。草の名前でママコノシリヌグイという蔓草があります。名前の由来はこの草の棘だらけの茎や葉で、憎い継子の尻を拭いたと言われています。韓国では「嫁の尻拭き草」と呼ばれるそうです。要するに弱者へのいじめのひどさが表現されています。

ママコノシリヌグイとイシミカワ

それではママコノシリヌグイとはどんな植物なのでしょうか。皆さんがよく知っておられるアカマンマ（イヌタデ）やソバなどと同じ仲間（タデ科）です。花はとっても小さく五㎜程で、茎の先に数個付けます。花が開くと先の方が薄紅色で、下は白のツートンカラーのきれいな花弁が五枚見られます。これを支える茎は細いですが、しっかりした下向きの鋭い棘が沢山生えています。実際にこの刺に触れてみると、これで「お尻をぬぐった!?」と想像するだけで、血だらけになる様子が思い浮かびぞっとします。棘は茎に限らず葉裏や葉柄・花柄など至る所にあります。

これととても良く似たものにイシミカワという草があります。葉の形は三角状、棘も鋭い、托葉もあります。相違点は花と実の色、葉の付き方です。ママコノシリヌグイは薄紅色でイシミカワは地味な緑白色です。イシミカワの実は三㎜ほどの球形で幾つかが固まって付きます。この実最初

葉柄は葉の基部に普通に付く



ママコノシリヌグイ（葉や茎に付く鋭い下向きの棘）

ママコノシリヌグイ（花）

は緑白色ですが熟すにしたがって赤味を帯び、更に青くなります。この三色が混ざっている時期のイシミカワは実に美しいです。更に葉の付き方ではイシミカワは葉の基部から少し内に入った所に葉柄が盾状に付きます。この葉の付き方さえ知っていれば花や実のない時期でも簡単に見わけられます。

イシミカワ（蕾）

イシミカワ
（鋭い棘、丸い托葉、葉は葉柄が盾状に付く）

もう一つ似たものとしてミヤマタニソバがあります。これは先の二つが里の河原や湿性の場所で見られるのに対して、山深い所の湿めりけがある場所に生育します。

ミヤマタニソバ

「蓼食う虫も好きずき」

タデ科の中にひどいというほどではないのですが変わった名前を持つものとしてウナギツカミという草があります。なるほどかなりの棘ですから名前の通りウナギをつかむのに都合が良いのかもしれませんね。これはひどいと言うよりユーモラスな名前ですね。この仲間にはアキノウナギツカミ、ナツノウナギツカミ、ナガバノウナギツカミ、ホソバノウナギツカミなどがあります。

アキノウナギツカミ

タデと言えば「蓼食う虫も好き好き」という諺があります。ここで言う蓼はヤナギタデという種で、囓るとすごく辛いです。鮎を食するときの蓼酢や刺身のつまに付く紫色の双葉はこのタデです。辛くないタデも沢山あるのに、わざわざ辛いヤナギタデを食べる虫がいます。いろいろなものがいるということから、人の好みはさまざまである様子を表す言葉として使われるようになりました。

牧野博士が名付け親の植物

ハキダメギクという名を持つ植物があります。掃きだめ?と聞き返したくなりますね。名付け親は牧野冨太郎氏です。牧野が東京・世田谷区の掃きだめで発見したことからこの名を付けたといわれています。何と安直なと言いたくなりますね。花がしゃべれたら、こんな名前いやだと言っていることでしょう。ハキダメギクと言うからにはあまりきれいではないのかなと思いきや、なかなか可愛らしい花です。しかも少し他とは違ってユニークな姿です。この花はもともと熱帯アメリカに分布していたものが大正時代に持ち込まれたものです。畑や空き地、路傍の掃きだめなど窒素分の多い所に生えています。晩夏から秋にかけて花を開くのですが、その花を上から覗くとタンポポなどのキク科植物と同じように周囲には舌状花、真ん中には筒状花があります。白い舌状花は一枚づつ間を空けて一回りします。そして一枚の舌状花の先は三つに分かれ、鳥か何かの足跡のようです。この形が何とも言えず面白く親しみを感じます。こんな形の花はあまり見ないので名前とともにすぐに覚えてしまいました。

ハキダメギク

この実を見たことありますか

牧野冨太郎氏は次の植物も命名しています。夏から秋にかけて河原の土手や畑などに淡紫色で二〜三cmの花を咲かせます。花弁が薄く淡紫色や白色ということもあり涼やかな感じを受けます。また花芯には黄色で五本の雄しべが突き出ていて引き締まった様子です。葉は大きな波状の鋸歯があり八〜一五cmと大きい。花が終わる頃にはたいてい草刈りされて見られなくなるのですが、たまに実をつけて残っているものがあります。若いうちは緑に濃い緑の筋がはいり小さなスイカのようです。そして熟すと黄色いトマトのように変身します。私も初めて見つけた時、「何じゃこれは」と一寸驚きました。この植物はナスやジャガイモ、トマトの仲間でジャガイモの芽などに含まれるソラニンを持ち有毒です。くれぐれもご注意下さい。「ははぁ、これでワルナスビと言うわ

けか」と感心しないでください。実は可愛い花だから一本手折ろうとして手を出すと、葉の裏や茎にある鋭い棘でひどい目に遭います。まさに悪さをする茄子という訳です。更に厄介なのは地下茎で広がり僅かの根茎からも芽を出し蔓こるという代物。今では環境省に要注意外来生物として指定されています。

次は長い引用ですが牧野冨太郎著「植物一日一題」（ちくま学芸文庫）から命名のいきさつを抜粋します。

「ワルナスビとは『悪る茄子』の意である。前にまだこれに和名のなかった時分に初めて私の名づけたもので、時々私の友人知人達にこの珍名を話して笑わしたものだ。がしかし「ワルナスビ」とは一体どういう理由で、これにそんな名を負わせたのか、一応の説明がないと合点がゆかない。

下総の印旛郡に三里塚というところがある。私は今からおよそ十数年ほど前に植物採集のために、知人達と一緒にそこへ行ったことがある。ここは広い牧場で外国から来たいろいろの草が生えていた。そのとき同地の畑や荒れ地にこのワルナスビが繁殖していた。

私は見逃さずこの草を珍らしいと思って、その生根を採って来て、現住所東京豊島郡大泉村（今は東京都板橋区東大泉町となっている）の我が圃中に植えた。さあ事だ。それは見かけによらず悪草で、それからというものは、年を逐うてその強力な地下茎が土中深く四方に蔓こり始末におえないので、その後はこの草に愛想を尽かして根絶させようとしてその地下茎を引き除いても引き除いても切れて残り、それからまた盛んに芽出って来て今日でもまだ取り切れなく、隣りの農家の畑へも侵入するという有様。イヤハヤ困ったもんである。それでも綺麗な花が咲くとか見事な実がなるとかすればともかくだが、花も実もなんら観るに足らないヤクザものだから仕方ない、こんな草を負い込んだら災難だ。

茎は二尺内外に成長し頑丈でなく撓みやすく、それに葉とともに刺がある。互生せる葉は薄質で細毛があり、卵形あるいは楕円形で

ワルナスビの実

ワルナスビ

波状裂縁をなしている。花は白色微紫でジャガイモの花に似通っている一日花である。実は小さく穂になって着き、あまり冴えない柑黄色を呈してすこぶる下品に感ずる。

この始末の悪い草、何にも利用のない害草に悪るナスビとは打ってつけた佳名であると思っている。そしてその名がすこぶる奇抜だから一度聞いたら忘れっこがない。

この草は元来北米の産でナス科ナス属に属しSolanumcarolinense L.の学名を有する。アメリカ本国でも無論耕地の害草で、さぞ農夫が困りぬいているであろうことが想像せられる。そしてこの草の俗名はHorse-Nettle, Sand-Brier, Apple of-Sodom, Radical-weed, Bull-nettle ならびに Tread softly である。」

タンポポのそっくりさんはフランス人？

ブタナという草を知っていますか？おそらく多くの読者が見ていることと思います。でも名前は知らないという感じの花です。在来のタンポポ（京都あたりではカンサイタンポポ）の花が終わりを告げる頃、あちこちの草地にタンポポの葉によく似たロゼット状の葉（根生葉）の真ん中から一本茎が立ち上がり、先の方で枝分かれをしてタンポポそっくりの頭花をつけます。タンポポ同様、花弁に見える舌状のものは、一個の花で数枚の花弁が合わさり合弁となっています。というわけで、ちょっと変なタンポポぐらいで見られているかもしれません。一斉に咲くとこれはこれで見事といえます。これも、欧州からやって来た外来種です。最初に発見されたのは札幌と言われ、タンポポモドキと名付けられました。安直ではありますが、良く特徴がわかります。その後、神戸の六甲でも見つかりブタナとして紹介されました。こちらはこの植物がフランス語で「豚のサラダ」と呼ばれていたものを和訳したものでしたが、現在ではこの名が一般に通っています。来春、もう一度ゆっくりみて見ませんか。

ブタナ（眞田幹雄氏撮影）

ブタナの咲く土手